

---

Hana

ayu

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

H a n a

### 【Zマーク】

N 7 1 0 9 V

### 【作者名】

a y u

### 【あらすじ】

退屈な毎日に飽きて自分から近づいた。  
私はなめていた。

本当の愛を。  
本当の罰を。  
本当の悲しみを。

踏み越えてはいけない一線を私は越えた。

今年の夏は夜も暑い。

それなのにクーラーをつけずに寝たせいで暑すぎて夜中に目が覚めた。

全身汗でびっしょり。

ダルい体を起してシャワーを浴びた。

「…………ひどい顔…………。」

鏡に映った自分の顔はコケて目の中のクマも気持ち悪いほどはっきりあつた。

こんな顔だから彼は離れたのだ。

もつと芸能人みたいに可愛ければ彼は私を選んでくれたに違いない。こんなふさいくな顔だから。

他の人に可愛いといわれようが、告白されようが彼でなければ意味がない。

キャンドルの入れ物を鏡になげつけた。

だけど鏡は割れなくて代わりに入れ物が割れてガラスが飛び散った。

足のいたるところから血が滲む。

だけど痛みはなかつた。

血が滲んでる太ももを見て自分が生きてることを実感する。

私は前を進む勇気もなく、だからって死ぬ勇気もなかつた。

まだ認められないのだ。

自分が負けたことが。

彼に捨てられたことが。

本当は気づいてないふりをしているだけかもしれない。

ガラスを片付けた。

指から血が出るのも気にせず片付けたら涙が出てきたけど泣いたら認めなくてはいけないから我慢した。

部屋に戻ると空はもう少し明るい。

また意味のない一日が始まる。

この部屋には思い出が多すぎる。

いたるところに彼がいた証が残っているから。  
耐えきれずに外に出た。

財布も携帯も何も持たずにして、適当に歩き続けた。

視界に海に入る。

意識はしなくとも私は知らない間に海に向かっていたみたい。

別に海が好きなわけじゃない。  
むしろ嫌い。

暑いし肌が焼けるし潮臭いし。

でも彼が好きだった。

だから私にもここに住むよつて進めてきたんだ。

外に出ても彼の思い出がありすぎる。

私はこんなに苦しみでいるけど彼は違うだろう。  
今頃隣りに奥さんが寝ているんだろう。

不倫がいけないことは分かつていた。

むしろ彼と出会う前は自分の気持ちをコントロールできず、  
不倫するなんて最低でバカなだけだと思つてた。

だけどいざ自分がその立場になるともう想いが止まらなくて  
彼の左手の薬指が光るほど好きになつていつた。

いけない事をしているという罪悪感さえもが快感に感じてしまつ。  
そして彼の思つてもいゝ約束を信じてしまつのだ。

それでもよかつた。

彼に奥さんがいようと彼の都合でしか会えなくとも  
私の家でしか会えなくとも周りに何言われようとも  
彼さえいればよかつたし、私にとつて彼が全てで  
彼こそが私の生きる理由だった。

だけど私は捨てられた。

それはそれはあつさりと。

彼はゲームをリセットするかのように私を簡単に捨てた。  
泣いてすがろうとしたけれど、そういう女を彼が一番嫌いなことを

分かつて いたから

我慢した。私は最後まで彼の気が変わることを願つて いたのだ。

でもダメだつた。

「アドレスも電話番号も変えるからもう連絡取れないから。  
写真もなく、彼の会社も何も知らない私にはもう彼との思い出は  
自分の記憶と想いだけだつた。

ひどい男だと思つた。

こんな男居なくとも生きていける。

私ならもつといい人を見つけられる。

何回も何回も言い聞かせた。

だけど無理なんだ。

だって私はどこまでも冷たく私を絶対に中にいれてくれない彼に惹  
かれていたのだから。

だから最後まで彼は私にとつて完璧な人だつた。

そのせいで私は今も苦しんでいる。

そしてまだ馬鹿みたいに期待して泣かずに一人で待つて いる。

私は彼の望む女でしょ う？

だから戻つてきて。

もしかしたら彼が戻つてくるかもしれない。

だから死ない。

まあ死ぬ勇気なんて持ち合わせてないだけかもしれないけど。

彼がいなくなつて昨日で三ヶ月。

私は後どれくらい待てば彼は戻つてくるんだろ う？

朝日が眩しくて田を開じる。

田を開けて彼が田の前にいたらしいのに。

そんな馬鹿なことを考えながら田を開けた。

## 溺

目を開けた。

もちろん彼はいなけれど。

ずっと海を見ると自分が人魚のよつて海の中に入つても呼吸ができる気がしてくる。

実は今これが夢で海の中に入れば夢から覚めることができる気がしてくる。

もちろんそんなことは不可能で「これが現実だと」ことは自分が一番わかっているんだけれど。

砂に足がとられるからサンダルを脱いで海へ向かった。  
岩の上をどんどん進んでいく。

滑つたら絶対怪我しちゃうよ。

一番端まで行つて海を見てみると結構深かつた。  
たぶん足はつかない。

もぐつちゃおうかな。

海の中がキラキラしてあまりにも綺麗だから。

こんなところで死ねるなら幸せだな。

今の私は命を大切にできない。

自分も周りの人も動物も植物も生きているもの全てを大切にできな  
い。

私には生きる希望も生きる理由も生きる資格も全てがない。

底なし沼で私はどんどん自分が沈んでいくのを慣れもせずただ眺めているだけ。

気が付いたらもう体は半分落ちかかっていた。

「…………うわっ！」

後ろから勢いよく引っ張られて尻もちをつく。

「『うわ・・・』めんなさいーー！」

声が聞こえて振り向くと同い年ぐらいの男の人が頭を下げてる

「えつ・・・だつ誰?なんで謝るの?なんでいるの?」

久しぶりに自分の大きい声を聞いて自分が一番びっくりした。

私の声を聞いて顔をあげたその人は短髪で日焼けをしていてどうみてもいい人って感じ

「いやつ・・・俺、ここ近くに住んでて、そんで海きたら、あつあなたがいて、えつと・・・そんで俺心配で・・・えつと・・・」

多分彼は私が心配でここまで来て落ちそうな私を助けてくれたんだ

るつ。

彼は全く悪くないのに焦つてどんどん汗をかきながら必死で言葉を探しているのがおかしくて笑つたらあつちも顔がひきつりながらも笑つた。

その時はもう何もかもがどうでもよくて笑いが止まらなくて、そしたら涙も止まらなくて笑いながら泣くなんて器用なことができんだなど冷静に考えてる自分がいた。

彼を失つてから初めて泣いた。そしたらもう止まらなかつた。

ずっと泣き続ける私を見て彼は困つていて。そりやそうだよね、初めて会つた子が笑つたと思つたら泣きだしたんだから。

「だつ・・大丈夫? 怪我でもしつ・・・・わあつ!・!・!

心配して立ち上がつた彼がバランスを崩して海に落ちてしまった。

「だつ、大丈夫? 誰か呼んでくる!」

「あー大丈夫です。俺よこそこから飛び降りたりしてたからちょっとあつちで待つててください。」

器用に浮かびながら彼が指を指した先は近くの砂浜だつた。

私は走つてそつちに行つた。

行く途中焦つて足を踏み外して岩と岩の間に落つこちたけど、  
そんなことよりも彼が心配で必死で戻つた。

私がそこに着くのとほぼ同時に彼も着いた。

「大丈夫！？」

「大丈夫です。なんかもう俺かっこ悪すぎで・・・」

「じめんなさい！私のせいで本当・・・」

「いやー！全然平氣・・あつ、足から血がでてるー。」

「あーせつ毛足踏み外しちやつて。」

「とりあえず一回水で洗わないとー。」

「こんなのは全然平氣だから。」

結局彼は譲らず、私は近くの水道で洗つた。

今彼は海水で濡れたTシャツを脱いで絞つてる。

びっくりした勢いで気が付いたらもう涙は止まつてた。

「あの・・・」

気が付いたら彼は目の前にいた。

呼びかけても返事をしない私を心配した田で見る

「仕事……大丈夫ですか？」

「えつ、私大学生ですよ。」

「うそつ！何歳なんですか？」

「21歳です。」

「えつ、タメ！？」

「えつ、年下じゃないの！？」

とりあえず彼は私に対しても敬語だったからやめてもらつた。  
また会うかなんて分かんないけど。

「名前……何？」

「凛子。泉凛子。そつちは？」

「林田颯太。何て呼べばいい？」

「あー別に向でもいいよ。呼び捨てとかでもいいし。」

「じゃあ凛ちゃんで。」

彼はいつも甘えるとおまつて凛ちゃんだと呼んだ。

全く違う人に呼ばれただけでも動搖する自分。

黙つてる自分に心配する彼・・・颯太くん。

いいよっと言つて笑うと颯太くんも安心したように笑つた。

「私用事あるからもう行くね。よくここ来るからまた見かけたら声かけて！」

びっくりしてゐる颯太くんから逃げるよう走つて帰つた。  
電話番号の交換とかの話になる前に逃げた。

もう会いたくなかった。

颯太くんは優しすぎる。

きっと私はいつか信用して自分が不倫していたことを話すだろ？  
そして颯太くんは自分のことのように心配してくれるだろ？

そんな人はいらない。

自分の罪を誰かと背負つてはいけない。

これは罰なのだから自分だけがうけなくちゃいけない。

家に帰つて彼から連絡がくるかもと期待してゐる原因の携帯をお風呂  
の中に落ちた。

もう不要だから。

アドレス帳でしか繋がつてない人たちは友達なんかじゃない。  
だからもうこの携帯の中に必要な人はいない。

本当は落とす時連絡が絶たれることを恐れて手が震えたけれど。

さよなら、さよなら、さよなら

心の中で何度も呟いた。

呪文のよつこ何度も何度も。

「そよなひ、そよなひ、そよなひ。」

あふれる涙は止まらないでひたすら泣きながら呟いた。

そよなひ、そよなひ、そよなひ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7109v/>

---

Hana

2011年10月9日13時51分発行